



有田に新風を もたらした 柿沢市郎さん



有田には素晴らしい日本画を描かれた川浪養治先生、洋画の田中太郎先生、そして現在も後進のご指導をされている原栄三先生、辻公也先生などがいます。さすがに有田ならではのことです。

このたび有田陶磁美術館開館50周年企画として「宮川香山展」を6月末まで開催中です。展示作品は名誉町民、故水辺喜一郎様のご寄贈によるものです。

宮川香山については有田町史に紹介されていますが、横浜の「真葛焼」として有名な作品が、何故「有田」と関係があるのかと疑問に思うところです。

ところが、宮川香山第2代の門下生として、有田へ新風をもたらした方が「柿沢市郎」さんです。(桑古場)

今回の「町史の行間」では柿沢さんについて紹介します。柿沢さんは石川県金沢市で明治36年3月の生まれ、県立金沢工業学校時代に同校教諭板屋波山先生が柿沢さん宅に下宿します。板屋先生は、皆さんもご存知のように明治・大正・昭和に涉って活躍された官展系の第一人者です。帝室技芸員、芸術院会員、文化勲章を受章された方です。柿沢さんは18歳で金沢工業学校窯業科助手となるのですが、同年学校の推薦で同じ帝室技芸員の宮川香山師のもと、横浜で修業することになるのです。

横浜で修業中、大正12年9月1日関東大震災に遭います。この地震で横浜市街の6割が焼失したのです。その当時の恐ろしさが忘れられないと、次女の弘子さんに話されていたそうです。

昭和2年(1927)24歳のときに国立京都博物館長で文部省文化財専門審議会委員の水町和三郎さんの紹介で、水町さんと縁の深い香蘭社へ入社されます。それは万国博覧会出品作品に柿沢さんの技量を取り入れる為でした。柿沢さんは香蘭社に10年間勤務後、中樽区で錦付業をされますが、昭和14年、再度香蘭社へ入社されます。その頃、沖縄出身の伊良皆さんも仕事仲間として過します。昭和33年香蘭合名会社美術品工場長、昭和35年香蘭社陶磁器販売(株)取締役に就任し、昭和42年に退任されます。柿沢さんは退任後も同社相談役、深川製磁、幸右衛門窯、鶴松陶園、幸山などで指導に当たられました。

ました。

当時、柿沢さんの指導を受けた渕野博巳さん(塩田町)は、よく自作の試作品を見てもらうために、先生のアトリエに通ったそうですが、先生への一番の感想は「本当に花を愛する人だった、本物の花を見てデザインされていた。その当時、有田では珍しかった蘭やスイトピーをあしらったデザインが先生の得意とするところだった」と、また観葉植物のアジアン・タムリの細かい葉を一つ一つ丁寧に表現され、それも一枚一枚が個性をもって表されているのには驚きでしたと話されました。

弘子さんの話によれば、お父さん(市郎さん)は、小さい頃から絵を描くのが大好きだった由、スケッチブックを離されなかったそうです。家族をととても大切に、皆んな揃って食事をし、コーヒータイムを楽しまれました。一方では仕事に実に厳しく、妥協を許さず、一途に追求する人でした。

ある日、蕾のついたバラを50本求めて帰られたそうです。このバラが開花し、散るまで、時々刻々をスケッチして、これが香蘭社の作品に反影し、好評を得ました。これは柿沢さんとバラと命の交流があったのです。毎日描いているとバラと語られるようになります。そしてバラの周りの空間密度が見えて来ます。バラも見つめられていることに反応するのはないでしょうか。これが精妙な描写によって作品に現われ、潤いのある表情のある作品へと、つながって行ったと考えられます。

夜中に何か音がするなどと思って部屋をのぞくとテッサンに熱中されていることも度々だったようです。人生には「のめり込む」ものがいいですね。充実した一日を過ごすことで充実した人生を送ることが出来ます。

柿沢さんは旅に出ることと釣りも楽しみの一つでした。昭和57年11月、79歳で黄泉の国へ旅立たれます。有田に新風をもたらした柿沢さんの作品を見せてもらいましたがいずれも表情があります。心のやすらぎを感じます。二度とない人生ですから人それぞれがその資質と天分を発揮することを通じて世の為に尽すところに人生の意義があると、つくづく思った次第でした。

(久富桃太郎)

季刊

皿山

2004

夏

No.62

有田町歴史民俗資料館・館報

平成の皿山職人像

水ゴテ（機械ろくろ）職人

平成28年、2016年に有田は創業400年を迎えます。この間、延々と受け継がれてきた有田焼の職人技があります。その一方で時代の変化や手工業の進歩などで、日々刻々と形を変えつつある技もあります。

現在どのような技が有田にあるのか、また、どのような職人さんがいるのかを次世代の人々にも伝えていきたいと思い、シリーズで“平成の今、活躍している職人像”を紹介していきます。

第二回目は水ゴテ(機械ろくろ)の職人さんです。



水ゴテを使った作業。ダボ(石こうで作られた置台)の上に外型をのせ、そこに地のべしたタタラをのせて水を使いながら成形する。

現在の有田焼成形は、電動ろくろのほかに前回紹介した鑄込み成形など型を使う方法があり、これらの中間的な方法で、水ゴテという機械を使う方法があります。この水ゴテという言葉で表現される機械ろくろの成形方法は「セラミック辞典」にも「陶磁大辞典」にも出てきません。有田独特の言葉かと思ひ、瀬戸市歴史民俗資料館に問い合わせたところ、あちらでも水ゴテといい、または動力ろくろ、立ちろくろともいうそうです。瀬戸地方では大正6年には確実にあったといわれていますが、有田地方でいつごろから使い始めたか、はっきりしません。ただ当館所蔵の昭和30年ごろの写真に水ゴテを使っている姿が撮影されていることから、そのころには一般的だったと思われる。

今回訪ねた工場は山内町にある山内陶業です。ここは幸右衛門窯・貞山窯・錦右衛門窯が共同出資した工場です。工場内では5人の職人さんが水ゴテやさらに自動化されたローラーマシンで成形していました。こ



昭和30年ごろの写真(深川製磁)

の道30年のベテラン、山口光昭さん(51歳)に話を聞きました。



山口光昭さん

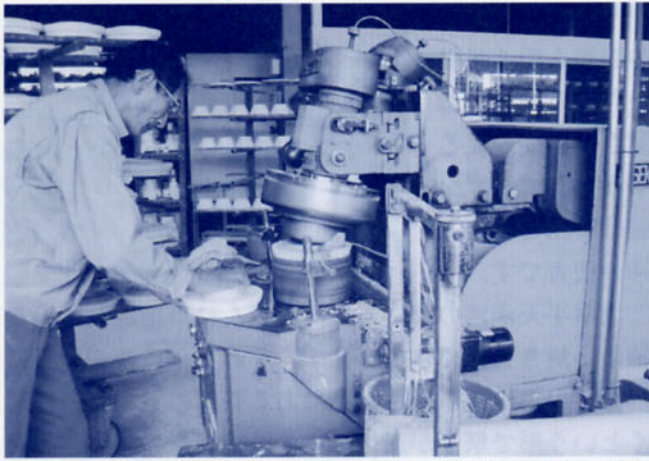
水ゴテを使った成形方法は、電気を動力として動かし、ダボと呼ぶ石膏で作った台の上に、形を作る石膏の型(外型・内型の2種類がある)を置き、それを回転させてタタラ(別の水ゴテで地のべした陶土)を置き、ハンドルのついてるヘラ(金鍔)を押しながら形を作っていきます。この時、水を使いながら延ばしていくので水ゴテというようになったようです。ローラーマシンは成形の際、水ではなく熱を使います。そのため、水ゴテとローラーマシンでは陶土の固さにも違いがあります。水ゴテとローラーマシンの大きな違いは、前者は多品種・少数の製品に対応できる点であり、後者は大量生産が出来る点です。一見簡単そうに見える作業ですが、器の厚みを一定に保つことは非常に難しく、長年の勘が必要となります。

製品によって、あるいは機械によって陶土の固さを変えますが、形ができたなら乾燥室に入れます。型から製品をはずすことを「おこす」、あるいは「おきる」といいますが、この時間は季節によって異なります。



水ゴテの一種。ハンドルのこてはプラスチックで、水を噴射させて成形する。

有田陶磁美術館開館50周年記念 「宮川香山」展 開催中



ローラーマシン。内型に陶土をおいて高温の焼ゴテで成形。水は全く使わない

約3～5時間の乾燥の後、最後の仕上げは金属製のカンナで削り、水拭きします。

このあと、別の場所にある工場に運んで絵付け、施釉、本焼などの工程を経て、製品が完成します。工場の一隅には、器の厚みを参考にするために半分に切った製品が棚いっぱいにならんでいます。これらは正確な厚みでできているかを調べるためのもので、最後に山口さんら職人さんは「これでいいということはない。試行錯誤しながら納得いく仕事をしたい。また、この技術を後進にも伝えていきたい」と話されています。

●資料館・庭の植物●

新緑がまばゆい季節となり、敷地内にある多くの植物の中で、資料館を訪れる方を大きな体で迎えるのが3本の「ホオノキ」です。白い花が開き、芳香を漂わせて、人の気を引きま



それ以上に驚くのが葉の大きさです。長さ20～40cm、幅15cm内外で、古来より食品などを包むのに用いられてきました。

このほかにも、館の周囲には四季を通じて桜や紅葉などが訪れる人を楽しませてくれますが、これらは昭和30年代に植林された樹木が成長し、そこに当館が建てられたもので、毎日自然の恩恵を十分に受けながら仕事に励んでいます。

ホオノキの下にはそろそろホタルブクロも花をつけます。資料館で有田の歴史を学び、周囲の自然も楽しんでいただくようお待ちしております。

有田町大樽にある有田陶磁美術館は今年、開館50周年を迎えました。この建物は明治7年、窯焼でもあった商人平林伊平さんの焼き物倉庫として建てられました。現在の有田商工会議所も平林家の敷地でした。その後、明治44年有田物産陳列館が建ち、昭和44年には現在の有田商工会議所が建てられましたが、石倉はそのままの形で残ってきました。

戦後の復興が進む中の昭和23年1月、この石倉を有田陶磁美術館として改修する会議が有田町役場で開催されました。同26年に制定された博物館法が翌年から施行されるというので、佐賀県や町の関係者が集い、会議を重ねて国や佐賀県の補助を受け、県内の登録博物館第一号として開館したのが昭和29年5月1日でした。

館内の改装にあたっては倉敷民芸館館長の外村吉之助氏の助言があったといわれます。現在も二階の天井には大きな梁が残り、焼き物倉庫だった歴史を感じさせます。開館当時は一階を常設展示、二階を企画展に利用し、「肥前陶磁器全貌展」「鍋島藩窯資料展」「古唐津展」などの企画展示を行っています。



有田陶磁美術館

また、働く人が出席しやすいようにと夜間に「木曜講座」と銘打って、スライドを使った勉強会も開催されていました。この間、国内外からの来館者が相次ぎ、開館にあたって指導助言をした陶磁研究家で文化財保護審議委員の小山富士夫氏、陶芸家の浜田庄司氏、写真家の土門拳氏始め、海外からは大英博物館のソームス・ジェニンズ東洋部長、米国シアトル博物館のロジャー副館長など多士済々の方々が訪れています。

開館のころを振り返って松本康町長(当時)は、鍋島直紹佐賀県知事や永竹威氏(当時県職員、美術館の学芸員を兼務)の功績に言及しています。その後、徳見知孝氏、百田節子さん、山澤一則氏、館林重夫

氏などが運営に携わってきました。建物は小さくともそれを動かしていた人々の力で、地域文化の拠点として活発な活動の歴史があります。

さて、このような歴史を持つ美術館ですが、その足跡と共に紹介しているのが宮川香山の作品です。有田との関わりは「町史の行間」で述べていますが、横浜の窯場で明治期の輸出陶磁器を中心に作られた作品の44点(参考資料を含む)を展示しています。生前、柿沢市郎さんがこれらの作品を解説した記録も見つかり、図録と共に資料として用意しました。作品を手がけた職人が明らかになったことは、現在まで例がないということです。

展示している作品は主にヨーロッパから買い戻されたもので、今回初公開となります。精巧な作りや絵の表現は、これからの作陶に役立つのではないのでしょうか。是非一度、ご覧ください。

- ・会 期 平成16年6月30日(水)まで
(休館 6月7日、14日、21日、28日)
- ・料 金 大人 100円(団体 60円)
大学、高校生 50円(団体 30円)
小学、中学生 30円(団体 20円)
(団体=20名以上)
- ・図 録 500円



〔12年に一度の山王祭り〕

12年に一度、中樽と上幸平両地区で行われる祭り、山王祭りが5月23日に開催されました。祭りの由来ははっきりしませんが、元来、滋賀県大津市の日吉大社(日吉神社)を総本山として広がっている信仰です。



県内では神埼町・仁比山神社がサンノウサンといって農業の神様として信仰されています。有田の場合はおそらく窯業の振興を願っての祭りとして始まったと思われます。

各戸の軒先には色とりどりの布で作ったお猿さんが吊るされ、

祭り当日の踊り手や御輿を引く子供たちの背には、お猿さんの姿を見る事が出来ました。猿は神使しんしといって神の使者です。



上幸平天満宮の東にある山王さんに奉納されている猿は、焼き物でできています。それを子供達が神輿に担ぎ、中樽の瀬戸口さん宅にある石造の猿に会いに行くという形で祭りが進行します。神輿を先頭に、出発地点や道中では女性たちが踊りながら約1キロを練り歩きました。

◎ 次回の山王祭りは奇しくも有田焼創業400年祭の年、2016年にあたります。区民のみなさんが祭りを引き継ぎ、さらに盛大な山王祭りとなることを願っています。



男たちよ、 しっかりせい!

5月になると県内の中学1年生が、泉山磁石場と当館を訪ねてきます。今年も、まず唐津市佐志中学1年生80名が、5月12日に見えました。

当地を訪れて一様に驚くのが泉山磁石場の風景です。ここで名護屋城を経て16万人の兵士が朝鮮半島に渡った文禄慶長の役の話をし、今から390年程前に泉山で陶磁石を発見して、150mの山が汗と涙で掘り出されて、先人の努力によって素晴らしい陶磁器が創り出された話をします。

そして、資料館で、江戸時代から今日に至る「やきもの」作りのプロセスを解説します。生徒は熱心にノートへ書きとめます。そして質問が鋭いのは驚きです。例えば、この陶石の成分は何から出来ているのですか、上絵に使う原料は何ですか、陶器と陶磁器の違いなどです。ところが、質問するのは殆ど女子生徒です。そして参考館で解説文をメモしているのも女子生徒です。男子で質問するのは、せいせい2人位です。

私は心の中で「オイ男たちヨ、モット、シッカリセイ」と呼びかけました。(久富桃太郎)

季刊『皿山』

通巻62号(平成16年6月1日)
編集・発行 有田町歴史民俗資料館

〒844-0001 佐賀県西松浦郡有田町泉山1丁目4-1
☎0955-43-2678 FAX0955-43-4185